

「リブ神話」を超えて

——現代日本女性解放運動史全体像構築の必要性——

樋熊 亜衣

第二波フェミニズムの歴史を振り返る際、その歴史はしばしば70年代に起きたウーマンリブと呼ばれる女性解放運動から出発し、80年代にはフェミニズム・女性学の発展、そして近年ではバックラッシュ勢力の台頭という流れで描写される。この40年の間に、女性解放を目的とした運動は様々な形で行われていた。しかしこれまで、女性解放運動というとウーマンリブ、特に一部の活動ばかりが注目され、現在では「それ以降の運動」が見えにくい状況にある。本稿では、女性解放運動イコール「リブ」という図式に至った過程を明らかにするとともに、その図式を維持するような「リブ再考」と呼ばれる近年のフェミニズムにおける傾向について検討を行い、女性解放運動の歴史を辿ることの意義について論じた。

1 問題提起

日本の女性解放運動とはいったいどのようなものだったのだろうか。1960年代後半から1970年代初頭にかけて、日本で新しい女性解放思想が登場した¹。ここから日本の第二波フェミニズムが始まったといわれている。その端緒とされるウーマンリブ（以降リブと表記する）の登場から現在までの約40年の間に、フェミニズムや女性学が登場したり、また、「男女雇用機会均等法」（1986年施行）や「男女共同参画社会基本法」（1999年施行）などの法律が成立したりと、一見すると女性解放思想は広まっていったように思われる。しかしながら一方では「日本社会を、『フェミニズムへのバックラッシュ』の動きが襲った」り（江原2010: 16）、アカデミックな場でのフェミニズムの権威化（牟田2006）などが指摘されている。「現代において」フェミニズムの動きは

目立たなくなっているが、それは、フェミニズムの成功の結果なのか、それとも逆風のせいなのか、フェミニズムは「いったい『どうなっているのだろうか』（牟田2006: 293）。

「フェミニズムが見えない時代」（菊地2004:34）といわれる昨今、フェミニズムを捉えようとする見方に、「制度疲労論的見方」があるという²（江原2010: 16）。これは、「『女性学創設』や『女性運動の歴史』を、『当初の目的や情熱を失って次第に形骸化してきた過程』とみるような見方」であり、しばしば「『原点に戻れ』というような主張」がなされている（江原2010: 16）。またこれに加えて、1979年に設立された「日本女性学会」が30周年を迎えるということもあり、近年では「これまでの歴史を振り返ろう」という趣旨のもと、多くの議論がなされてきた³。

そうした議論の中、女性運動についてもしばしば言及されてきた⁴。しかしその際、活動

家が自身の携わった活動を語ることはあっても、それら個々の活動を包括するような、運動全体の動態が描かれることはなかった。特に、研究者が第二波フェミニズムにおける女性解放運動に注目する場合には、フェミニズムの出発点とされているウーマンリブばかりに視線が集中している。さらにその視線もまた、リブの特定の活動家、その主張や活動の独創性に向けられており、次第に「ある種の『神話』」（溝口ほか編 1994: 6）ともいえるような「リブ」という像ができあがってしまった。しかし筆者は、リブはあくまで出発点であり、それに続く女性解放運動がどのように展開していったのかを明らかにすることが重要であると主張したい。そこで本稿は、まずリブに関する先行研究や、リブ当事者の手記から、リブがどのような運動として語られ、フェミニズムの歴史に位置づけられていったのかを明らかにする。次に、現在リブに対して向けられている視線を整理し、2000年頃から登場した「ウーマンリブ再考」という傾向について考察を加える。最後に、75年に結成された「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」の当時の活動報告書やメンバーの手記などから、「リブ」から「それ以降の運動」への広がりというものを提示したい。そして、女性解放運動の歴史を描くことの意義や方法について考察する。

2 女性解放運動の断片化

2-1 リブという運動

リブとは1970年代に盛り上がった女性解放を目的とした運動であり、それ以前の婦人運動や新左翼運動などとは異なる新しいタイプの運動であったといわれているが、どのような点が異なるのか。リブの大きな特徴として、性

の解放を主張した運動、意識変革を求めた運動ということが挙げられる。リブが登場する以前にも、「女性問題」は存在していたが、それは「制度改革に追いつかない女性の意識の遅れや能力の不足を補って民主主義社会の政治主体として、また労働者として自立させるという問題」であり、それは「あたかも女性が原因であるがゆえに生じる問題であるかのような響きがあ」った（江原 1985: 103）。それに対してリブは、『「問題なのは女性ではなく女性の解放なのだ』と主張した』（江原 1985: 103）。リブが変えようとした意識とは、そうした大きな「女性」という性の枠組みであり、それは活動する女性自身の意識から社会全体の意識まで、広範囲に及ぶものであった。彼女たちが変えようとしたのは、例えば、女性であるがゆえに課せられてきた母役割、妻役割といった性役割⁵や、「女性らしい」ふるまいであった。また彼女たちは、女性というカテゴリー全体を分断するような「聖なる存在＝母」と、そこから外れるような女性を「汚れたもの＝性欲のはげ口」として扱う社会の規範⁶までも暴露した。リブは、70年代当時「平等なんだから、女だって何でもできるんだと反発する半面、……小さい時から『女』を注ぎ込まれ……どう生きればいいのか、言葉にならない矛盾や不安を抱えて」（女たちの現在を問う会編 1996: 71）いた女性たちに大きな影響を与えた運動であった。

しかし当時は、「女が自身の性を正直に大勢の前で語るのは画期的なこと」（女たちの現在を問う会編 1996: 25）であり、それはいわゆる一つのタブーであった。そのためメディアは、“リブとはフリーセックスを推奨する運動だ”という「大いなる揶揄をもって取り上げた」（西村 2006: 12）。1985年にリブの総括を行った江原は、カリカチュアライズされた形でしか

リブが報道されなかったため、リブをヒステリックで身勝手な女性たちとしか連想できない人が多いと記している⁷。こうしてリブは、世間から冷たい目⁸でみられるようになり、その後女性史の中にも位置づけられることなく、まるで存在しなかったかのように扱われてきた⁹(加納 2003; 鹿野 2004)。

2-2 75年断絶説

こうした背景から 80 年代 90 年代には、「70 年代のリブ運動をふりかえり、その運動の中でいったい何が求められたのか、何が焦点であったのかを捉え返」(江原 1985: 101) ずという作業が行われた。また、リブ当事者の手記や、当時の資料を集めた資料集などが発行されるなど、リブに関する情報が蓄積されていった時期でもあった¹⁰。

こうした振り返りの作業の中で、上述したような婦人運動との違いや、リブの主張というものが整理されていった。しかしリブという運動の存在が描き出される一方で、「リブ」と「リブ以降の運動」という境目が次第に濃くなっていった。

「リブ運動は、75 年を境に大きく二つに分けられよう」(江原 1985: 105)。江原は 1975 年の国際婦人年を境に、リブは 70 年代前半と後半とに分けられると主張した。彼女の区分によれば、70 年代前半の運動は、「ぐる一ふ闘う女」を中心にした世代的に若い女性の、小グループ連合体が担い、一方後半の運動は「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会(以降「行動する会」と表記)」を中心に、世代や社会的地位が、前半と比較すると上層の女性たちが活躍した時期だという。江原は前半と後半とでこのような主体の交替があり、さらにこの両者の間にはほとんど協力関係はなかったとみている。それどころか後半になると、運動は広

範な社会的承認を得るようになった一方で、そこに前半のラディカリズムはほとんどなく、「初期リブ運動の提起した問題は十分に引き継がれ」なかったという(江原 1985: 109)。また「初期のリブ運動の主張にこそ、なぜ 70 年代において女性解放が問題化されざるを得なかったかという問題、すなわち新しい女性解放運動の必然性を切り開く視点が存在する」と指摘し、江原自身も前半の活動に焦点を当てている(江原 1985: 109)。

牟田もまた、「ウーマンリブの『ラディカル』さが、その後の運動に必ずしも引き継がれなかった」とみている(牟田 2006: 298)。牟田は、国際婦人年から「85 年まで続く『国際婦人の 10 年』と連動した政府・自治体の女性施策」に深く繋がる運動を担っていたのが、「国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会」(現「国際婦人年連絡会」)であったとし、リブとは時期が重なっているものの、両者は必ずしも同調していなかったと述べている(牟田 2006: 295-6)。さらに、「そもそも個人の生き方と既存の権力構造とを問題にした『解放の運動』としてのリブ運動」が、国連・政府主導の動きに対して、距離感を感じるのとは当然であり、連絡会とリブとは「75 年の時点では乖離していた」(牟田 2006: 297) と主張する。

江原は後に「主体の交替という意味は、実体的な意味ではなく、反響や影響力に着眼して分析的に構成したときのそれ」であり、活動家が実際に運動から身を引いたということではないと説明している(江原 1990: 5)。しかし上野によれば、現在ではリブを 70 年代前半と後半とで区別するような見方が「優位」になっており、「後発のフェミニズム・女性学の研究者がそう指摘するのみならず、リブの担い手の側からも積極的にこの『断絶』を指示するような証言

がある」と指摘している（上野 2009: 28）。確かに江原や牟田がそう指摘するだけでなく、リブの当事者からも「国際婦人年以降の運動」と「それ以前の運動であるリブ」（田中美津 2005: 46）と区別されており¹¹、国際婦人年を機にリブは一つの区切りを迎えたと見られている。

2-3 リブとフェミニズム

しかし一方では、リブはそのあとに登場するフェミニズム・女性学へつながるものとして位置づけられてきた。上野は「フェミニズムを、リブを含むより広い文脈でとらえたい」と述べ、その理由として「第一に、リブの担い手たちは、75年以降も活動をやめたわけではないし、第二に、フェミニズムの担い手たちは、リブから直接・間接のメッセージを受け取って、それを言語化・運動化しようとしているひとびとだから」という二つを挙げている（上野 1994: 23-4）。

また、75年で主体が交替し、リブのラディカリズムは引き継がれなかったと主張する江原も、「リブ運動が提示した問題は、その深さと重要性において現在でもけっしてその意義を失ってはいない」と述べており、さらには「現在われわれが直面しているもっとも重要な課題は、リブ運動が提示した問題に対する『理論化』を行うことである」（江原 1985: 155）と、リブの主張がフェミニズムにとって意義のあるものであったと認めている。また上野は、自身のフェミニズムが「リブの理論的な後付け」（上野・田中 2003: 8）であると明言しており、「リブからフェミニズムへ、言葉は分節化したかもしれないが、……わたしたちに必要なのは、それを受け取り育てる力である」（上野 1994: 23）と、リブの主張の理論化が重要であると主張している。

こうして女性の歴史に位置づけられずに 80年代を迎えたウーマンリブは、掬い上げられる

過程で次のような運動として語られてきた。“リブは、そのあとに続くフェミニズムの中でも色褪せない意義をもつ問題提起を行った運動であった。”しかしそれは 75年の国際婦人年を境に一つの区切りを迎え、70年代前半の運動の方がリブであるとする見方が、現在では主流になっている。そうして、70年代前半のラディカルな運動は、80年代に登場するフェミニズムの前史として位置づけられていった。

3 リブへと集中する視線

2000年代に入ると「ウーマンリブ再考」（渋谷 2008）や、「リブ・ルネッサンス」（上野 2009）といわれるような傾向がみられるようになった¹²。この傾向の特徴の一つとして、リブの時代を直接知らない人々がその担い手であることが挙げられている（秋山ほか 2004; 渋谷 2008）。リブ再考の担い手である「若い世代」について、渋谷晴子は「アカデミックな場での女性学研究が可能となった世代でありながら、一方で理論化傾向の困難とも直面し、それを乗り越える試みをしている世代」だと説明している（渋谷 2008: 46）。

しかしなぜリブ再考なのか。この傾向のもう一つの特徴として、再考の担い手がフェミニズムの行き詰まりを感じていることを指摘できる。たとえば渋谷は、「フェミニズム理論が学問として洗練されていく一方」で「実感の伴わない」「『私』の身近な問題経験」と離れてしまった、と語る（渋谷 2008: 47）。また菊地夏野は「今はフェミニズムが見えない時代」だと述べ「研究にしる運動にしる……全体として共通する問題意識が見えにくくなっている」（菊地 2004: 34）と指摘している。牟田も同様に、第二波フェミニズムは現在「『どうなって』い

るのだろうか」(牟田 2006: 292) と投げかけ、フェミニズムは「リブの運動の出発点を離れ、制度化し権威化し」ているという。こうしたフェミニズムの行き詰まり¹³に対して、リブの主張は「フェミニズムが現在直面している困難を考える上で示唆に富む」(牟田 2006: 298) と考えられているのだ¹⁴。

これは、江原のいう「制度疲労論的見方」に当てはまるといえる。江原はこうした見方が若い人々にみられるというが、リブ当事者からも同様の見方が現れている。

リブから 30 年経って、女性は解放され、世の中はずいぶん変わったはずなのに、どうもよくなった実感がない。むしろ、30 年前に望んだのとは全然違う方向に行っていて、これでよかったのだろうか、もう一度考えなおさなければならないんじゃないか。(秋山 ほか 2004: 256)

だがこうした見方が「登場した」というよりもむしろ、「リブのあげた支離滅裂でもナマの叫びが、女性学・フェミニズムという形で理論化され、整理され、だんだん難しくなっているのではないか……議論のための議論になって」いくのではないか(秋山 1993: 208)、「女をめぐる状況は変わったのか……私たちが求めていたものはこんなものだったのか」(私たちの現在を問う会編 1996: 199)、といった当事者の疑念と、「制度疲労論的見方」を持った世代とが合流した結果、リブ再考という形になって現れたのだ。

確かに、リブ再考の中では、現在失われてしまったとされる「ラディカルさ」や「リブのナマの叫び」というものがリブの魅力として描かれている¹⁵。リブとは、「ある政治的な成果を

上げようとする運動ではなく、解放の過程自体を目的とする運動」(千田 2010: 134) であり、また「『女であること』の意味を徹底的に問おうとする思想の運動」(牟田 2006: 299) なのである。「リブが個人的な話を語り合った」のに対して、「個人の実体験を話し合って何が問題なのかを抽出しあう…というふうな場」がなく(皆川ほか 2009: 22)、「理論と体験の乖離」(渋谷 2008: 46) が指摘される今のフェミニズムには、自身の意識や体験を問うたりブの姿勢が必要だと考えられているのである。

しかしながらここで注意しておきたいのが、「原点」として注目を浴びているのが、70 年代前半の一部の活動であるということだ。例えば 1975 年に結成された「行動する会」のメンバーであった山口智美は、現在リブに関するものは、初期のリブばかりが高く評価され、「リブはすごかった」というリブ理想化の状況になりがちであると指摘している(山口 2008)¹⁶。特に注目されているのが「ぐるーぷ闘う女」のメンバーである田中美津である。野田さやかは田中を取り上げる理由として、彼女の言葉が活字化されていることもあるが、それ以上に田中が「リブらしさ」を重視してきたと説明している(野田 2004: 72)。もちろん田中はリブの「キャラクター」(秋山 1993: 203) といわれるほどに、リブを語る上で不可欠な存在であることは承知している。しかしリブは特定の人物や地域の運動ではなく、学生から主婦まで幅広い年代の女性に影響を与えた運動であった。それにも関わらず、このように一部の運動にのみ光を当てることで、周囲の他の運動が見えなくなり、さらには光が当てられている部分の運動ですら、強い光のせいで輪郭がぼやけ、「リブ」という像だけがそこに「ある」ものとして伝説化してしまうのだ。

4 女性解放運動の歴史

ラディカルな運動であった「リブ」へと注目が集まることによって、他の運動が見過ごされてしまっている。70年代初期のリブが当時の女性に与えた衝撃は大きなものであった。そしてそうした衝撃は、刹那的に70年代前半の「リブ」の女性にだけ与えられたものではない¹⁷。75年に発足した「行動する会」のメンバーである吉武は、リブが登場した当初のことを次のように振り返っている。「ウーマン・リブの主張はきわめて鮮烈で……この新しいタイプの女性解放運動に、私はぐいぐいと傾斜していった」（吉武2006: 126）。60年代の新左翼運動などの男性中心の運動には居心地の悪さを感じていた彼女は、リブの登場に対して「居場所が見つかった」と感動したという。しかし当時「40代に足を踏み入れ、マスコミで仕事をして」いた彼女にとって、「願いに願っていた女主体のリブ運動の中にあっても、やはり居場所がない」という寂しさを感じざるを得なかった。そんな折、彼女の下に一本の電話がかかってくる。それが「行動する会」発足の誘いであった。

「日本にもリブ運動が誕生はしているけれど、どちらかというと運動はアウトドロップ型で、若い方が中心。来年はいよいよ国際婦人年。国際婦人年を契機に、当たり前前に働いて生きているそれなりに年輪も重ねてきた私たちのリブの会。中年リブ運動を展開していく必要があるのではないかしら……。」¹⁸ わたくしは感うことなく二つ返事で引き受けた。（吉武2006: 193）

確かにリブは、75年で一つの区切りを迎え

たのかもしれない。しかしそれは、あくまで一部の運動を見た場合のことであり、女性解放を目的とした運動はその後も続いていったのである。「行動する会」の1975年10月号活動報告には、「離婚の母の家」設立の要望書とともに以下の記事が書かれている。

現在かけこめるのは五日市にただ一つ、一時保護所があるだけ……行政に働きかけてこのようなものをもっと作らせると共に……離婚そのものの暗いイメージを吹き飛ばすようなゆったりとした気持ちで女同士支えとなりあい、自立への展望をまさぐっていける、そんな空間を私たちの手で作り上げていかなければならない。（国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会1975: 6）

これが書かれた2年後の1977年、実際に「駆け込み寺とも言うべき東京婦人センターがオープン」した（国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会1977a: 12）。ほかにも「行動する会」の活動の中で大きく注目を集めたものに、メディアへの異議申し立てとして、「NHKへの要望¹⁹と、以前から会の中で問題になっていた『私作る人、僕食べる人』のCM抗議」などがある（行動する会編1999: 24）。このような、行政への働きかけや、メディアへの申し入れといった活動は、70年代前半の「リブ」とは異なるものと区別されるかもしれない。しかし、女性解放のための運動であったということを否定することはできないだろうし、「行動する会」のメンバーが「リブ」の重視した「身近な問題」を切り捨ててしまったわけではない。1977年の定例会の報告書には「自分の身の回り、すなわち近隣や家族との関係、職場での関係などでぶつかっている問題を出し合

い、そうした関係を変えていくための手がかりを探ろう」とある（国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会 1977b: 2）。国際婦人年以降に登場した運動体は、担い手や方法などが70年代前半とは異なる部分もあっただろうが、それはウーマンリブという運動を全く無視して登場したのではなく、少なくとも「行動する会」はリブから何かを受け取った女性たちによるグループであった。

それはまた、リブが批判の対象とした婦人運動の女性たちにも波及していた。日本婦人問題懇話会会員の酒井はるみは、リブは「その内容と形態において母親運動の盲点をあまりにも突いたものであり、「新しい時代に相応した新しい動き」であると語っている（酒井 [1971] 2000: 34）。さらに1974年に開かれた第14回全国婦人の会では、状況改善の運動ともう一つの柱として、自らの意識を変える運動を加えようというスローガンが掲げられた（全国婦人の集い実行委員会 1991）。

70年代前半のリブは、従来の規範を問い直すような問題提起を行った。ゆえに女性解放運動の先行者として注目を集めてしまうのは仕方ないことかもしれない。しかしリブの提起した問題が何かを知ることとともに、それがどのように次の世代の運動に引き継がれていったのかを、女性解放運動の歴史を、明らかにすることが必要なのである。

5 結論

日本の女性解放運動とはどのようなものであったのだろうか。この問いに答えるためには、70年代前半のリブのみを見ていても無駄である。リブは「女性」という性の認識そのものを問題として扱った。そしてそれは当時様々な抑

圧に苦しんでいた女性たちに一つの活路を提示した。そうした影響は年齢や地域、職業によって制限されるものではなく、例えばそれまでリブに共感しながらも運動に入っていけなかった女性にも、運動への扉はすでに目の前に置かれていたのである。こうした本稿の主張を支えてくれるものとして、社会運動のサイクル²⁰という概念を取り上げたい。Tarrowは、運動が辿る過程を簡単に次のように説明している。

わざわざ慣習の殻を破ろうとする者は、ほとんどいない。しかし、誰かがそれを敢行したときには、機会が生み出され、思想と行動のモデルが与えられる。それを利用する者は、より制度化された方法でより穏健な目標を探求し、それを効果的に進めていく。サイクルの熱狂の後に残るのは、改革という置き土産である。（Tarrow 1998 = 2006: 290）

運動は、サイクルと呼ばれるような波を持っているといわれるが、日本の女性解放運動の波はどのようにして描けるだろうか。本稿では最後に、数量的なデータを使い運動の波を描く方法を考えてみたい。例えばデモやビラ配り、討論会などのイベント²¹の数を数量的なデータとして用いることができるだろう。当時発行されたミニコミ誌や活動報告に、そうしたイベントの連絡が記載されているので、イベント数をデータとして用いることは可能だ。さらに、単純にイベントの数量から運動の盛衰をみるだけでなく、どのようにイベントの内容が変化していったのか、議論の対象の変化なども見ることができる。また、Costain (1992) が1950年から1986年までの「New York Times」のニュース記事のアブストラクトをコード化し、分析を行ったように、新聞記事などから女性問題に

関する記事の量を図ることで、運動体の変化だけでなく、女性問題に対する関心の推移もまた明らかになるだろう。以上のように、数量的なデータを用いれば、日本の女性解放運動の大きな波を捉えられるだろう。そこから、運動が勢いを持った時期、また勢いを失った時期に、一体何が起きていたのかを知ることができる。

70年代にリブとして噴出した意識変革という志向は革新的だった。しかしそれが80年代90年代の運動にどのように引き継がれていったのか、どのような帰結に至ったのかを明らかにしなければ、運動という形で現れた女性の声はそのまま消えてしまい、無かったものとされてしまうだろう。海妻は「『これまでの研究や運動は、こういうことを取り上げてこなかったのではないか』と発言しては、上の世代から『やっていたのに…』『リブの時代からずっと議論しているのにどうして知らないの』みたいな反応が返ってくる、という経験をしてきた」（皆川ほか2009:18）という。こうした問答を繰り返すことがないよう、今なお積み残されている問題が何かを知るためにも、女性解放運動が残した「改革という置き土産」を明らかにするような女性解放運動史を描くことが望まれる。

注

¹ この当時、女性参政権の実現後も「社会習慣や社会意識による性差別に関して十分に主題化されず、「女性参政権実現後数十年を経た国々の多くにおいても、男女間の格差が強固に存在し続け」、「性別役割分担に基づく社会は、高度経済成長期にあって強められるなど、変革されないままであった」（井上ほか編2002:401）。

² 江原は、「制度疲労論の見方」と「発展論の見方」の二つに大別できると述べる。発展論の見方とは、「女

性学や女性運動によって女性の意識が高まり女性の状況も改善した」とみる見方である（江原2010:16）

³ 2008年には「女性学研究会の30年を時代につなぐ」と題した座談会が、大学教員6名、大学院生5名で行われ、2010年度の日本女性学会大会シンポジウムは「社会を動かす女性学」という題で、どちらも女性学30周年という節目に、歴史を振り返ろうという意図を持っていた。また、『ピープルズプラン』51号では、「ジェンダー平等は日本でなぜ進まないのか」という特集を組み、フェミニズムがこれまで何をしてきたのかという議論がなされている。

⁴ 女性運動といった場合、女性主体の運動という意味から、女性解放を目的とした運動という意味までであるが、本稿では前者と後者を区別するために、両方を含むより広い意味で女性運動とし、後者のみを指す際は女性解放運動とする。

⁵ 当時の女性の人生は、「娘、妻、母といくつにも輪切りにされ、家族の絆で結びつく相手の男性（父、夫、息子）によってその運命は大きく左右されていた」（藤枝1985:46）。また、西村はリブ運動の出発点は、「女たち自身が社会で承認された性役割イメージに合わせて生きてきたという発見」（西村2006:13）であったという。

⁶ 「処女であることが若い女の商品価値であり、一生の食い扶持が保障される結婚への片道切符であり、主婦か娼婦に分かれる基準であった」（西村2006:11-2）。

⁷ 一方で『朝日都内版』の報道は運動のピラの掲載、座談会の開催など、積極的にリブを取り上げ、リブ運動を顕在化する役割を果たしていた（齊藤2003）。こうしたメディア報道が、各地の女性たちに「仲間の存在を知らせた効果は小さいとはいえない」（秋山1993:33-48）。

⁸ リブとして活動していた森や土井は、その当時「ヒステリー女、バケモノ女」「ブスの恨み辛み」などと言われたと、当時の様子を振り返っている（瀬山・山上2004）。

⁹ 「総合女性史研究会編『日本女性史第5巻 現代』(東京大学出版会、1982)、同『日本女性生活史第5巻 現代』(東京大学出版会)、同『日本女性の歴史』の「性・愛・家族」「文化と思想」の各巻(角川書店、92、93年)、永原和子・米田佐代子『おんなの昭和史—平和な明日を求めて』(有斐閣、86年)には、ウーマン・リブはほとんどあるいは全く無視されている(鹿野2004:3)。

¹⁰ 『リブ私史ノート』(秋山1993)や、『全共闘からリブへ——銃後史ノート戦後篇8』(女たちの現在を問う会編1996)などのリブ活動家の手記だけでなく、1992～1995年にかけて溝口明代・佐伯洋子・三木草子編集による、70年代当時のビラやミニコミ誌の記事などをまとめた『資料日本ウーマンリブ史』全三巻なども刊行された。

¹¹ 田中美津は75年以降の運動が「いわゆる法制度を変えることに主眼が置かれるようになっていった……でも、自らを問うところから始めているという発想が希薄になって」しまったと記述している(上野・田中2003:48)。また井上輝子は「行政の中で行動計画づくりとか、……そこにエネルギーを吸い取られていったということは否定できない」という(現在を問う女たちの会編1996:56-7)。

¹² 2004年に『リブという<革命>』刊行記念シンポジウム、「日本女性学会大会シンポジウム——ウーマンリブが拓いた地平」が開催される。またリブを主題とした研究も増加している(たとえば野田さやか2004、田中亜以子2007など)。再考傾向については渋谷(2008)が詳しい。

¹³ ほかにフェミニズムが直面している困難について、青山薫は次のように説明している。「リブとフェミニズムが女を縛る象徴として批判した『化粧とハイヒール』が消費社会において多数の女性を魅了する力を持ち、男女共同参画社会基本法ができたと思えば激しいバックラッシュが大衆化し……ジェンダー平等は遠い」(青山2010:27)。

¹⁴ ほかに、野田(2004)や千田(2004)も、リブから学ぶことが多いと述べている。

¹⁵ 若い世代のフェミニストにとって「フェミニズム理論を消費したり『理論的整合性』の追求をしたりするのではな」い、「リブの担い手が、既成の言葉や理論を安易に受け入れてしまうことを拒否し、自らの体験を語る言葉を求めてもがき、そうすることで紡ぎだした<私の言葉>」が、「最大の魅力なのだ」(渋谷2008:62)。

¹⁶ 男性アクティビストのリブ再考の特徴として、海妻径子は次のように語る。「男性アクティビストや男性研究者たちからは、『リブには心揺さぶられるものがあつたのに、いまの女性運動にはそれがない』としばしば言われる。彼らの目の前にいる女性センター職員や私は、彼らにとっては『女ではなく』……そんな彼らも『文字の上』では女性運動に敬意を払うのだ」(海妻2010:88)。

¹⁷ 当時のミニコミ誌『女・エロス』には、1975年ごろは「国際婦人年」のためか「あごら、婦人通信札幌」といった、いくつかのグループが結成されたと記してある(女・エロス編1976:125)。

¹⁸ カッコ内の発言は、吉武が受けた電話の内容である。

¹⁹ これには番組内で性差別用語(女(男)だから、男(女)のくせになど)を使用しないでほしいといったことから、ニュースを担当するのは男性アナウンサーばかりで、男女のアナウンサーが担当してほしいといった内容が書かれていた(行動する会編:24)。

²⁰ 「サイクル」とは、1989年にTarrowが唱えた概念であり、一言でいうと「運動が交流し沈静化する軌跡」(中澤2004:25)を指す。またこれは、「個別の運動の盛衰ではなく」他の要因と相互作用しながら形成される「比較的長い期間における抗議水準の盛衰のこと」を指している(渡辺2004:67)。

²¹ こうしたイベントの分析を「イベント分析」と呼ぶ。「イベント分析とは、集会、デモ、ストライキなどといった社会運動の活動(これをイベント

とよぶ)に関する数量的アプローチの総称」のことを指し、「イベントの数の増減から社会全体における社会運動の活動水準を知ることができる」(山本・西城戸:2004:85)。

文献

- 青山薫,2010,「ジェンダー平等は日本でなぜ進まないの——特集の狙いと概要」『ピープルズ・プラン』51:24-29.
- 秋山洋子,1993,『リブ私史ノート』インパクト出版会.
- 秋山洋子・千田有紀・田中美津・加納実紀代,2004,「〈リブという革命〉がひらいたもの」『かけがえのない, 大したことのない私』インパクト出版:242-298.
- Costain, ANNE N, 1992, *Inviting Women's Rebellion — A Political Process Interpretation of the Women's Movement*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- 江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房.
- , 1990, 「フェミニズムの70年代と80年代」江原由美子編『フェミニズム論争——70年代から90年代へ』勁草書房:2-46.
- , 2010, 「女性学30年の歩み——『社会変化』との関連で」『女性学』18:15-24.
- 藤枝滯子, 1985, 「ウーマンリブ」朝日ジャーナル編『女の戦後史・昭和40・50年代』朝日新聞社.
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編, 2002, 『岩波女性学事典』岩波書店.
- 海妻径子, 2010, 「『新しい〈運動〉主体』論と女性運動への『敬意』——小倉利丸『抵抗の主体とその思想』を手がかりに」『ピープルズ・プラン』51:88-91.
- 鹿野政直, 2004, 『現代日本女性史——フェミニズムを軸として』有斐閣.
- 加納実紀代, 2003, 『リブという革命——近代の闇をひらく』インパクト出版会.
- 菊地夏野, 2005, 「フェミニズムとアカデミズムの不幸な結婚」『女性学』12:34-46.
- 行動する会記録集編集委員会, 1999, 『行動する女たちが拓いた道——メキシコからニューヨークへ』未来社.
- 国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会, 1975, 「活動報告10月号」.
- , 1977 a, 「活動報告4月号」.
- , 1977 b, 「活動報告6月号」.
- 皆川みず系, 藤田嘉代子, 大橋由香子, 海妻径子, 2009, 「つながる? つながれない? 〈女〉と〈女〉—リブやフェミニズムは何を伝え、現実はどう変わったか?」『インパクション』171:19-39.
- 溝口明代・佐伯洋子・三木草子編, 1992, 『資料日本ウーマンリブ史I』松香堂.
- , 1994, 『資料日本ウーマンリブ史II』松香堂.
- , 1995, 『資料日本ウーマンリブ史III』松香堂.
- 牟田和恵, 2006, 「フェミニズムの歴史から見る社会運動の可能性——『男女共同参画』をめぐる状況を通しての一考察」『社会学評論』57(2):292-310.
- 中澤秀雄, 2004, 「争議のサイクルとレポートから見る社会変動」曾良中清司ほか編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂:25-52.
- 西村光子, 2006, 『私たちのコレクティブ 70年代リブを再読する』社会評論社.

- 野田さやか,2004,「日本における第二波フェミニズムの展開と課題——『遅れてきたフェミニスト』がリブから学ぶもの」『甲南女子大学大学院論集』:71-82.
- 女たちの現在を問う会編,1996,『全共闘からリブへ——銃後史ノート戦後篇 8』インパクト出版.
- 「女・エロス」編集委員会編,1976,『女・エロス』7 社会評論社.
- 斉藤正美,2003,「『ウーマンリブとメディア』『リブと女性学』の断絶を再考する——1970 年秋『朝日新聞』都内版のリブ報道を起点として」『女性学年報』24:1-20.
- 酒井はるみ,1971,「ウーマン・リブと戦後の婦人運動」『社会変革をめざした女たち——日本婦人問題懇話会会報アンソロジー』ドメス出版:30-36.
- 千田有紀,2004,「引き裂かれた『女』の全体性を求めて」『女性学』12:26-33.
- ,2010,「小熊英二『1968』リレー書評(3)リブの歴史を描くということ」『ピープルズ・プラン』50:131-136.
- 千田有紀・田中美津,2010,「田中美津さんインタビュー『リブ』は何を変えたのか」『ピープルズ・プラン』51:30-50.
- 瀬山紀子・山上千恵子,2004,「30年のシスターフッド 70年代ウーマンリブの女たち」女たちの歴史プロジェクト.
- 渋谷晴子,2008,「『第3世代』フェミニストとリブとの距離は何か」『女性学年報』29:45-69.
- 田中亜以子,2007,「ウーマン・リブの『性解放』再考——ベッドの中の対等性獲得に向けて」『女性学年報』28:97-117.
- 田中美津,2005,『いのちの女たちへ——とり乱しウーマン・リブ論』パンドラ.
- Tarrow,Sidney,1998, *Power in Movement — — Social Movements and Contentious Politics, Second Edition*, Cambridge: Cambridge University Press. (= 2006, 大畑裕嗣監訳,『社会運動の力—集合行為の比較社会学』彩流社.)
- 上野千鶴子,1994,「日本のリブ——その思想と背景」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『リブとフェミニズム』岩波書店:1-32.
- 上野千鶴子,2009,「日本のリブ——その思想と背景 付 増補編解説 記憶を手渡すために」『新編 日本のフェミニズム 1 リブとフェミニズム』岩波書店:1-52.
- 上野千鶴子・田中美津,2003,『美津と千鶴子のこんとんからり』木犀社.
- 渡辺勉,2000,「社会運動の国家間比較——政治的機会構造概念の有効性」『理論と方法』15(1):135-148.
- 山口智美,2008,「居酒屋アキラ 『山口智美さん』その2」,youtube,(2012年1月10日取得,http://www.youtube.com/watch?v=OZEOW9w-HB4&feature=endscreen&NR=1).
- 山本英弘・西城戸誠,2004,「イベント分析の展開——政治的機会構造論との関連を中心に」曾良中清司ほか編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂:83-114.
- 吉武輝子,2006,『おんなたちの運動史——わたくしの生きた戦後』ミネルヴァ書房.
- 全国婦人の集い実行委員会,1991,『男女の平等をめざして自立・連帯・行動:全国婦人の集い 28年のあゆみ』悠山社書店.

(ひぐま あい、首都大学東京大学院人文科学研究科社会学教室、mamegocoro@yahoo.co.jp
(査読者 千田有紀、中澤秀雄)

Rethinking the Myth of “Uman-ribu”

Towards a Total Perspective of Women’s Liberation Movements in Japan

HIGUMA, Ai

Looking back the history of second-wave feminism, it is usually portrayed as starting from “Uman-ribu,” the movements that occurred in the 1970s with the aim of women’s liberation in Japan. In portraying the series of events which followed this epoch, it has been indicated that it was this “Uman-ribu” that directly developed into “Feminism” and “Women’s Studies” (that feminism was established in the 1980s), and that feminism was later confronted with a backlash in the 2000s. While movements aimed at women’s liberation have been varied throughout history, “Uman-ribu” is the only movement of second-wave feminism that has been considered in contemporary historiographies. Hence it is not clear how the new women’s liberation movements, of which “Uman-ribu” was but one among many, expanded into the subsequent movements. In this paper, we clarify the process of how historians have worked out this exclusive scheme: “the only women’s liberation movement is Uman-ribu,” and claim that it is important to examine not only the origins but also the whole history of the new women’s liberation movement.